ISSN 0286-1968

河上肇記念会報

No. 15
1983. 9. 10

〒542
大阪市南区島ノ内一―二〇―一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五二―三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

八三年度　総会御案内

朝夕はしのぎやすい今日この頃、いかがお過ごしですか。今年の総会のご案内を申し上げます。

今年は参議院議員宇都宮徳馬氏をお招きし、今日の政治情勢と河上精神について（仮題）のご講演を頂く予定です。さらに現在河上全集は順調に進み、いよいよ河上書簡が刊行されるという佳境に入りました。しかも数多くの書簡に加えて、最近新たに注目されるものが発掘されるということもあり、そこで全集編集にご努力中の本会世話人代表杉原四郎先生に新発見の書簡を含めた編集こぼればなしをお聞かせ下さるようお願いいたしました。多数ご参会下さるようお願い申し上げます。

一、日　時　一九八三年一〇月二三日（日）
　　午前一一時～午後三時

一、場　所　京都　法　然　院
　　（京都市左京区鹿谷御所ノ段町二四）
　　会場案内図（一五ページ）参照

一、臨時会費　四、〇〇〇円（会場費、昼食費含む）
同封のハガキで一〇月一〇日までに出欠のご返事を願います。
（お手数ですが四〇円切手を貼って下さい。）

目　次

河上・櫛田共訳『共産党宣言』の草稿
―両者のマルクス研究史の一齣　……大島　清　(2)
河上肇著「貧乏物語」鑑賞（3・完）　……前川文夫　(6)
河上文献、図書紹介　……(7)
会員通信　……(10)
当番日誌　……(14)
八三年総会案内　(1)、入会のすすめ、会則　(16)

河上・櫛田共訳『共産党宣言』の草稿

～両者のマルクス研究史の一齣

大島　清

大阪朝日をめぐる河上と櫛田

『櫛田君は大正六年四月に大阪朝日新聞社に入社されたが、それは私が仲介したのであった。そしてこの手紙で見ると、その話はおそくも前年の六月頃から始まったものと見える。この手紙に『村山氏には数回面会致候』としてあるのは、多分櫛田君からの手紙に、私が村山氏（朝日の社長村山龍平氏）に会ったことがあるか、どうか、といふ意味の言葉があり、それに対する返事なのだらふと思ふ。」

これは河上肇が一九一六年六月二五日付で櫛田民蔵あてに書いた手紙について、後年、河上が書き残した『櫛田民蔵君に送れる書簡についての思ひ出』の一節である（大内兵衛・大島清編『河上肇より櫛田民蔵への手紙』法政大学出版局、四五ページ）。

この手紙の書かれた当時、櫛田は高野岩三郎教授の指導のもとに東大助手をつとめていたが、彼自身の言葉でいえば、本を読む研究助手ではなく、本を運ぶ〝人足助手〟であった。その櫛田が恩師・河上先生のすすめもあって大阪朝日新聞社に勤める気になり、河上は村山龍平社長や鳥居素川編集長に会って入社のあっせんをしたのであるが、櫛田の方は、入社は二年先、それまで朝日は学費補助をすること、という難かしい条件を申し出たりして、入社交渉は難航し、一年ちかくつづいたのであった。

河上がヨーロッパ遊学中『大阪朝日』に連載した「祖国を顧みて」は広く読者の好評を博したが、そのためもあったのだろうが、村山社長から朝日入社の勧誘をうけたことがある。河上はこれを断ったが、特別客員として定額の手当を受取るほど朝日とは特別に深い関係をもち、そんなこともあって櫛田の入社について骨を折ったのである。この間の経緯は河上の櫛田あての手紙に記されているとおりである。

ところで最近、私は櫛田が森戸辰男氏あてに送った八〇通ちかい手紙（いずれも未発表）を披見する機会をもったのであるが、それによると大阪朝日入社後の櫛田の仕事ぶりはもちろん、朝日の社内事情、ことに鳥井素川・長谷川如是閑・大山郁夫・丸山幹治・花田大五郎ら幹部社員が退社する前後の〝朝日騒動〟に関する櫛田の観察などが読みとれ、まことに興味深い思いをしたのである。いずれこれらの書簡は、今秋刊行の予定されている『櫛田民蔵全集』第六巻に収録されることになるであろう。同じくこの巻に発表される櫛田の権田保之助その他知友あての書簡類と、『河上肇全集』に収録・公表される予定の書簡類とを併せ読めば、河上と櫛田との学問的人間的交流の秘められた姿が――その全貌とまではいかずとも、従来以上に一層具体的に――読者の眼前に浮び上ってくると思われる。櫛田あての河上の手紙（一九一七年三月八日付、未発表）で書かれているように、「私がもし何時か死んだら――人間だから何時死ぬかも知れぬが――そうして学術雑誌の雑報欄の一隅にでも吊詞が載せて貰へるなら、私は是非それは君に書いて貰ひたいと、平生から思って居ます。」というほど河上の櫛田に対する愛情と信頼には深いものがあった。朝日入社のあっせんにおいても河上は、櫛田の希望する条件を可能なかぎり実現させようと、苦心を重ねたのであった。このころ櫛田はまた高野みよ（高野房太郎の遺子）との結婚話しがもつれ、河上にその悩みを切々と訴えていたことは河上書簡にもその一端が記されている。友人の森戸あての手紙には一層なまなましい彼の苦悩がにじみ

でており、ことにこの問題に介入した福田徳三の不可解な言動に対する櫛田の憤慨が人間不信にまで高まってゆく心理的動揺が読む者の心をうつ。結局、種々の経緯ののちこの問題は一件落着し、やがて櫛田は恩師山口小太郎の娘・山口富貴との結婚がきまり、河上がその媒妁人をつとめたことは前記「櫛田民蔵に送れる書簡についての思ひ出」に述べられているとおりである。

櫛田の見るところによれば、当時の大阪朝日の内部には「日本及日本人党」「私学党」「帝大党」の三つの派閥があり、このうち「私学党」というのは早稲田大学出身の記者が中心をなし、極めて党派的で非民主的な振舞いが目立ち、櫛田はその動きに不信と不安を感じていたのである。入社当時は論説記者としての仕事に喜びを感じていた彼も、その後、鳥井編集長と衝突して退社し、特別客員となった。その直後、米騒動に関する筆禍事件が発生し、鳥井・長谷川ら民主的幹部が連袂辞職するに及んで彼は朝日の反動化を憂慮した。櫛田は事態の一層の悪化を防ぐため河上に会い、「先生、乗りだす気はありませんか」と朝日への出馬をうながしたのであるが、河上は「イヤとても、出かけても怒って帰るばかりだ」と言ってこれを断った（一九一八年一〇月二三日付、櫛田の森戸あて書簡）。この種の生ぐさい世俗的問題の処理には無能であることを誰れよりもよく自覚していた河上としては当然のことであったと思われる。

河上の旧蔵書「共産党宣言」

スミスとマルクスの研究

さて大阪朝日記者としての櫛田は、論説を執筆するかたわら経済学の研究をおこたらず、たえず河上と学問上の意見の交換をつづけた。次の森戸あて一九一七年八月一二日付書簡の一節は、当時の彼の学問的現実的関心のありかを示している——

「スミスとマルクスとより外に経済書は読まぬ事と心ひそかに決めて来た僕は、丸善からの新刊書目の到着毎に、今日の朝日歌壇に

日は行けど我は進まず吾が心、知恵にさそわれいらだちけるも

とある其の『いらだち』を感ずる。……（中略）

どうかして職工組合を認めさせたいネ。——そしてもう少し組織的にやらせたいネ。此の頃僕のかくものは、それにばかり引かけ力をこめている。……（後略）」

事実、このころの櫛田の書いたものを見ると「労働争議調査」（『経済論叢』第五巻第三号、一九一七年七月）や「現内閣と労働問題調査」（『大阪朝日新聞』同年一一月九日）その他の労働問題に関するものが多い。

またスミスについては——

「同志社の雑誌は風邪にたたられて原稿が集まらず弱って居ます。僕は、スミスと社会問題でなことをかきました。スミスをして今日あらしめば社会主義者ならん乎と云ふ意味です…」（同上、一九一八年

一〇月三〇日付）

この論文は同志社大学法学会の機関誌『政治学経済学論叢』（第一巻第一号、一九一九年一月）に載った「スミスの賃銀論と社会問題」である。この中で彼は、スミスの賃銀論を検討し、土地・資本の私有制がなければ地代・利子もありえないというスミスの見解は、私有財産制を否定する社会主義の主張の一歩手前にある、と論じた。そしてここでも彼は、スミスの賃銀論にふくまれる見解には、労働運動によって賃銀を引上げることは可能だとする労働組合主義者の主張を裏付けるものがある、と論じた。いずれにしろ当時の櫛田が、労働運動その他社会運動に強い現実的関心をもってスミスを研究していたことを、うかがわせるに足るであろう。

同じころ櫛田は、森戸辰男が『国家学会雑誌』（一九一八年一〇月）に発表した論文「社会政策の概念」を高く評価し、次のように述べている

「……社会政策の概念は真に十人十色、今は我国でも何人かが立ってその真概念を闡明すべき時と存じます。この際大兄がこの問題に筆を染められたことは、時も時、人も人、自分は大なる期待を持って続篇の出でんことを待って居ります。」（森戸辰男あて、一九一八年一〇月一三日付の手紙）

櫛田は、大阪朝日の論説を執筆するに当り、その主たる担当テーマを「社会政策」としたのであるが ――朝日退社後、同志社大学の講義も社会政策であった――、このテーマの下に労働問題や社会主義の理論や政策についてペンをとりつづけていたのである。そしてまた、このような「社会政策」が朝日の紙面にとって必要かどうかについて、烏井編集長と意見の食いちがいがあり、これが櫛田退社の一つの理由ともなったと思われる。

『共産党宣言』共訳・刊行の準備

スミスとならんで櫛田が研究対象にえらんだのはマルクスであったことは先にふれたが、彼はひそかに河上と共訳して『共産党宣言』の出版を計画していたのである。次の森戸あて手紙の一節に ――

「マルクス誕生百年を記念して共産党宣言の合訳（河上先生と）をパンフレットとして世に出すつもりに候。この十日までに訳了出版のつもりにてヘビーをかけ居り候。日本でもモウこの種のものを読むの必要あるやに感じ候。……（後略）」（一九一八年四月二八日付）

この手紙を書いた時、櫛田はすでに朝日を退社し、同志社大学講師として教壇に立っていた頃であるが、それにしても河上と共訳して最も危険な国禁の書『宣言』の刊行を企てるとは、大胆というか無謀というか、私はこの手紙ではじめてこの事実を知り驚いた。

右の手紙を書いた数日後、櫛田の執筆した論説「マルクス一〇〇年」が『大阪朝日』（一九一八年五月六日）の紙面に現われた。

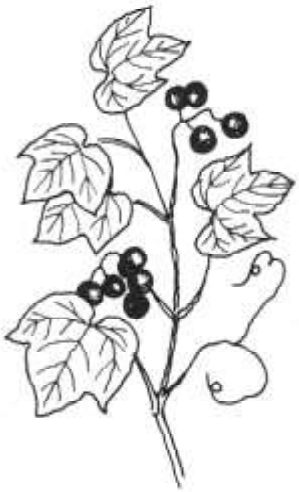
「ドイツの社会民主党は、大陸での一大政党だが、その立脚地はひっきょうマルクス唯物史観に立脚したものである。ロシア今回の社会的革命は、その成敗は未定だが、彼が主張のもとづくところは、やはりマルクスの史観にほかならぬ。もしそれ彼の剰余価値論にいたっては、これ実に第三階級の哲学たる資本主義経済学に根本的批判を加えたもので、いまや世界の経済学者は、これが研究、しからざればこれが攻撃に全力を注いでいる。善かれ悪しかれ、マルクスを度外視して、現代の経済を談ずることはできない。世界の大乱は、どう結末がつくか、いまのところ空漠たるものであるが、この大乱は、一面においてマルクスの予言にたいする試練であるといえる。このときに当り彼の誕生一〇〇年を迎えうるも奇縁である。」（『櫛田民蔵全集』第四巻、新版三九二ページ）

マルクス生誕百年を記念する文章としては、『大阪朝日』という大新聞の論説として、当時としてはぎりぎりの線を行くものであったであろう。他方、河上・櫛田共訳の『宣言』の草稿がどういう運命をたどったか、それ自体興味ある問題であるが、いまその詮索は措く。河上の『宣言』研究がその後すすんでいたことは、『社会問題研究』の第二冊（一九一九年二月）、第六冊（同年六月）、第九冊（同年一〇月）、および特に第一六冊（一九二〇年六月）に発表した「共産党宣言に現われたる唯物史観」などに見ることができる。河上はこの論文の中で、櫛田が「唯物史観と社会主義」（『我等』第一二号、一九一九年一〇月）において訳出した『宣言』の数節をそのまま引用しているが、この訳文が右に記した河上・櫛田共訳草稿の一部であるかどうか、これらの点についても今後の研究にまちたいと思う。河上はまた一九一九年一二月より週一回、京都大学文学部の一教室において、ドイツ語版『宣言』のプリントを用いて約二〇名の学生に講義をしていたこと、その席には恒藤恭も列していたという事実もあり（河上より櫛田あての手紙、一九一九年一二月一六日付、未発表）、これらの既知・未知の事実をたどっていくと、河上のマルクス研究の歩どりが、より具体的に明らかにされるであろう。

最後に、櫛田の『宣言』研究と訳文について二、三ふれておきたい。櫛田は、同志社大学を在職一年余で辞任したのち一九一八年九月、東大経済学部の講師となった。そして一九二〇年一月刊の学部機関誌『経済学研究』第一巻第一号に、『宣言』の一部『社会主義および共産主義文書』の訳文を発表した。彼はこの職も半年後には早くも捨て去り、一九一九年七月に大原社会問題研究所の研究員となり、間もなくドイツ留学のため日本を去った。その時彼は研究所に『共産党宣言の研究』（草稿）を残していったのであるが、この中には『宣言』からの訳文が多くふくまれている。この草稿はその後所在不明となっていたが、それが書かれてから半世紀の後、大内兵衛の補修を加えた上で公刊された（『櫛田全集』新版第三巻に収録）。このような事実から推定すると、彼は同志社大学時代の前後、すでに『宣言』の全訳を―河上とどの程度の協同作業を行なったか否かは不明としても―完了していたものと推定して大過ないであろう*。

＊宮島達夫氏の詳細をきわめた言語学的研究の結果によれば、一九三〇年に大阪市労農書房発行、長谷川早太発行人により非合法刊行物として発行された『共産党宣言』は、櫛田民蔵の訳文とみて間違いなかろう、ということである。すなわち「……ここで便宜上長谷川30とよんでいる訳文（前記長谷川早太邦訳本『宣言』のこと――引用者）が、全体として櫛田民蔵の手になるものであり、基本的には一九二〇年にできあがっていたことは、ほぼ確実とおもわれる。」（宮島達夫「『共産党宣言』の訳語」『言語の研究』むぎ書房、一九七九年刊、四四二ページ）。

一九三〇年当時、産業労働調査所大阪支所の研究調査活動の中心的人物の一人であった越智道順は大原社会問題研究所の所員であり、櫛田と近い関係にあった。越智の仲介によって櫛田の『宣言』邦訳原稿が労農書房の手に渡ったことは十分考えられることであるが、この間の事情について確実なことはわからない。



河上肇著「貧乏物語」鑑賞(3)・完

前川文夫

(三)

最後に私はこの書「貧乏物語」から、河上の人間性を示す数個所をぬき出して、この小論を閉じようと思う。もちろんこれまでの数多くの引用によっても充分に河上の人間性はうかがいえる。しかし、生来の道徳主義・人道主義に加えて、当時にあっては、おそらく耳新しい発想であったであろうことを、河上はこの書の中で折りにふれて述べている。まず、(三の二)にこんなくだりがある。

――トルストイのしたことは実に驚くべきものである。高貴な祖先を有する一貴族として、遊んでいて食わしてもらうことを拒絶し、自分の手で働いていくことに努力し、つい近ごろまでは奴隷の階級に属していた百姓らとでき得る限りその艱難辛苦を分って行こうとした……しかし、彼が百姓らとともにその貧乏を分つということは、これは彼にとってとうてい不可能である。何故というに、貧乏とはたゞ物の不足をのみ意味するのではない。欠乏の恐怖と憂懼、それがすなわち貧乏であるが、かかる恐怖はトルストイのとうてい知るを得ざるところだからである。――

ここで河上の言っていることは従来の説教とはおよそ性質を異にするし、精神論をこえ、彼生来の道徳主義をもこえて、「貧乏」の点の理解にせまっている。

次に、英国で当時実施されていた貧乏退治の具体策、「養老年金条例」については先に述べた。それについて河上は次の如く言う。

――いまこの法律についてわれわれの特に注意すべき点は、年金を受くることをば権利として認めたことである。人は一定の年令に達するまで社会のために働いたならば、年をとって働けなくなった後は社会から養ってもらう権利があるという思想、これをこの法律は認めたものである(四の一)――

河上がこの思想に共鳴していたか否かは定かでない。しかし、こゝに取り上げている以上、彼がそれに反対であったとは考えたくない。私は、当時、わが国に権利意識がどこまで育っていたかを全く知らぬけれども、この辺に注目する河上の感覚を心にとゞめておきたいと思う。少し主観的かもしれぬ。次に移る。

――今日まで行われて来た奢侈・ぜい沢という観念には私の賛成しかねるところがある。けだし、従来の見解によれば、ぜい沢としからざるものとの区別はもっぱら各個人の所得の大小を標準としたものである。例えば、巨万の富を擁する者が一夕の宴会に数百円を投ずるがごときはその人の財産、その人の地位から考えて相当のことであるから、その人達にとっては決してぜい沢とは言わないが、しかし、百姓が米の飯を食ったり肴を食ったりするのはその人の収入に比較して過分の出費であるから、その人達にとってはたしかにぜい沢である。こういう風に説明して来たのである。しかし、私がこゝに「必要」といい、「ぜい沢」というは、かくのごとき個人の所得、または財産を標準としたものではない(十二の三)――

平等思想の行きわたった昨今でも、河上のこの指摘に目覚める人はいくらもいると思う。事大主義感覚の強かったと想像される当時の人達には耳新しいことばであったにちがいない。

――「ぜいたく」をもって貧乏の原因であるとするも、ぜい沢をするものはやがて貧乏になるぞという従来の勤倹論と見地を異にして、富裕な人々がぜい沢をしているということが、多数の人々をしてその貧乏な

る状態を脱することあたわざらしむる原因であるという意味である（十二の四）――

河上の貧乏論にもとづく富者への警告であるが、言う通りに、富者のために言っているのではなく、貧乏人のために言っているのが私の注意をひく。

――私は金儲けのために事業を経営するのを決して悪いことだとは言わぬ。多くの事業はいかなる人がいかなる主義で経営しても、少なくとも収支の計算を保っていく必要がある。たゞ、金儲けにさえなれば、なんでもするということは、実業家たる責任を解せざるもの、少なくとも自分が金儲けのためにしている仕事は真実世間の人々の利益になっている、という確信を全ての実業家にもってもらいたいというのである。（十三の一）――

偉大な学者・実業家といえども、ときに自分の仕事の社会的意義について意外に近眼的である。河上は自分の学問はもとより、人間生活の目的さえ、全ては「道」のためであるとした。こゝでは、そんなに深い意味にとることはないと思うが、単に彼の道徳主義、人道主義が述べしめたものと解したくはない。貧乏の責任をまず富者にそして生産者に求めたのである。

★　★　★　★　★

私の今一番の仕事は河上肇の人間性を追求することである。そのつもりで、一昨年、河上生誕百年の年、「社会主義評論・私見」を書き、いまやっと、「貧乏物語・鑑賞」を書き上げた。しかし、それらはあくまで私の趣味であり、河上研究というより、私自身の心情を書きたいのかも知れぬ。ともあれ、河上理解にはほど遠い。次は第二貧乏物語について書こう。そして、晩年の詩歌について、最後は自伝を精読しようと思う。そして、私の〝河上肇像〟を画くのだ。そのためにも、河上肇全集が期待される。

図書紹介

『戦死やあわれ　西川勉遺稿・追悼文集』　西川勉遺稿・追悼文集編集委員会編・刊（新評論発売）　一九八三年七月　頒価五、〇〇〇円

故西川勉氏は「テレビ評伝・河上肇」（のちアルバム評伝として出版）の制作者として本会によく知られており、東京河上会の幹事役もつとめられた人である。氏はＮＨＫ教育科学部のチーフディレクターであり、昨年七月一五日、ラジオ夏期特集番組「戦死やあわれ」取材のため関西へ出張、その帰途、新大阪駅ホームで亡くなった。四八才の働き盛りであった。

本書は西川氏の一周忌を前に友人によって編集刊行されたものである。本書の標題は氏の遺作となったものよりとられ、その草稿が本書第Ⅰ部に収録されている。第Ⅱ部「美と人生　ディレクターとして」の章に氏の遺稿として「河上肇私論」（『アルバム評伝・河上肇』）、「幻の出会い――漱石と河上肇」（「東京河上会会報」四七号）、「河上肇とスペイン市民戦争」（「トポス」一九八〇年第一号）、「上野誠・河上肇・野間宏」（「形象ニュース」一九八一年一二月号）と四編の河上論が収録されている。

氏の仕事がテレビ、ラジオ番組の制作という点で、本書編集には苦労があったと思われる。おかげで氏の番組年譜や「日曜美術館」の一作を、そして多くの人々による追悼文を、さらに氏のジャーナリズム批判、詩と思想の論文を読み、真摯な学究の人、西川勉像をきづくことができた。

また本書最後の章「ひとすじの道を ―父と子」によって氏の友人、家族、家庭をも知ることができた。最後に本書の編集者たちは「われわれは、それぞれ西川勉と親密な交際がありながら、彼の生前はお互いにはとんど面識がなく、ご遺族から編集のご依頼を受けなければ、赤の他人同様であった。西川勉のそんな人づきあいの仕方がまた彼の人柄を偲ばせるのだが、そんなわれわれを一つの仕事に集中させてくれたのは、やはり西川勉その人であった。彼は、死して後もわれわれのディレクターであった。そして不思議にもわれわれの西川勉像は、最初から何の食い違いもなかった。」（あとがき）と書いている。河上関係図書紹介文としてここに紹介者の思い入れの駄文が加わっているのも西川勉の魅力とお許しを乞う。

河上肇全集　岩波書店（刊行順　前号のつづき）

第一五巻　解題　山之内靖　　六月刊

人口問題批判、マルクス主義経済学、経済学大綱

全集月報18

経済学者・河上肇（河野健二）、河上先生と津田青楓（後藤清）、国語の教材になった河上肇の文章（杉原四郎）、河上肇と岩波茂雄（山之内靖）

第一四巻　解題　平井俊彦　　七月刊

階級闘争の必然性と其の必然的転化、大正一三年一月から昭和元年一二月の論説、昭和二年二月～三年一二月連載の「唯物史観の自己清算」

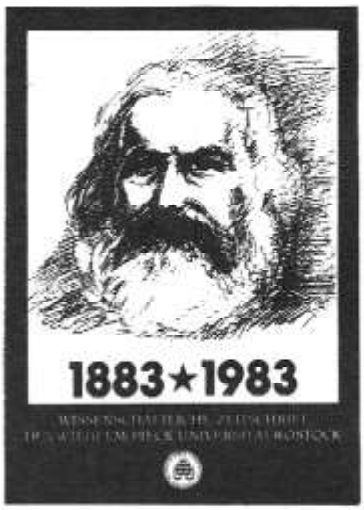
全集月報19

福本和夫と河上肇（清水多吉）、東京の屋根の下から（高島善哉）、本当のこと（長洲一二）、《資料紹介》河上政男「私」（抜粋）

河上文献だより

マルクス死後一〇〇年と河上肇

今年、一九八三年は三人の社会科学の巨匠一〇〇周年に当る。カール・ハインリッヒ・マルクスは死後（一八一八、五、五―一八八三、三、一）、ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター（一八八三、二、八―一九五〇、一、八）およびジョン・メイナード・ケインズ（一八八三、六、五―一九四六、四、二一）は生誕の祝年である。日本の多くの新聞、雑誌が三人を一緒に、あるいは各人別々に「死」と「生」の一〇〇周年をとりあげた。なかでもマルクス死後一〇〇年は、「マルクスと現代」、「マルクスとは何だったのか」等々の特集とし、多くの論説が発表され、今も発表されつづけているといってよい。私には勿論すべてを読み、理解する能力はないが、一世紀を経過した「現在」の視角から、マルクスが発した問い方や答え方についての当否に論者たちが真剣にとりくんでいる息遣いを感じることはできる。



「けじめ」、「祝祭」とはいえ、マルクスをたずね、マルクス主義を問うとき、当然日本のマルクス主義をたずね、その導入史を想起することが日本の論者に課せられている視角でもあると思う。ここで数多くの特集論文のうち直接

日本のマルクス主義をとりあげ、日本マルクス主義者河上肇を対象とした二つの論文を紹介しておきたい。

(一) 松田道雄、「日本に土着したマルクス主義 ――河上肇と『志士』の伝統」『朝日ジャーナル』八三年三月四日号

(二) 馬渡尚憲、「河上肇と宇野弘蔵 ――日本のマルクス主義の心と理性」『別冊経済セミナー、マルクス死後一〇〇年』八三年二月刊

松田氏は、日本に渡来した三つの信仰の一つとしてマルクス主義（他は儒教、キリスト教）をとらえ、「マルクス主義も日本の風土になじまされようとしたし、また習俗のなかにとけこんでいるというのが、マルクス死後一〇〇年における私見である」と述べられている。馬渡氏は、日本のマルクス主義が今日「世界的にも誇りうる一定の水準まできたということはいえる」述べ、この発展を可能にした客観的条件は戦後「一言でいえば現憲法体制のおかげということ」であり、主体的条件としては「多くの先覚によるマルクス主義研究、その定着、発展への努力による」と述べられている。

日本のマルクス主義の先覚者河上肇について、松田氏は「明治の時代にそだった典型的なインテリゲンチアとして、外来のマルクス主義と、正面から格闘し、みずからその学説を是認しながらも、信念としてたたかいつづけたのは、河上肇だけであった。それは、いまになってみれば、河上のマルクス主義習合の努力であり、マルクス主義の土着の一風景であったといえる。」と。馬渡氏は「戦前の日本のマルクス主義を代表するのは河上肇であり、戦後は宇野弘蔵である」ととらえ、河上のマルクス経済学に開眼した宇野との対比によって論じている。

（明解で、ユニークな松田氏の河上評伝に知的刺戟を与えられたことと、河上と宇野とを「日本のマルクス主義の心と理性」という馬渡氏の視角に学ぶことがあった。）。

河上政男遺稿集について

七月配本の「河上肇全集」第十四巻、全集月報に夭折した河上肇の令息政男の「私」という文章が抜粋、紹介されていました。

「今、私は静です。私の心も、私の脈搏も、今静かです。小さい頃の事が思い出されます。その頃の断片をあなたにお話しませう。」と、この文章ははじまり、「家」、「雹」、「色紙」、「婆や」、「京都」、「病院」の断片が短い、詩のような文章で書れています。（原本では「一銭銅貨」、「虚つき」、「運動会」、「鉛筆」、「選挙」、「鼠」、「中学生」と加わってこの章は終っています）詩的センスに欠く私にも、一読して、さわやかな気分にさそわれました。

この遺稿集の存在は、一海先生の「愛児の死と詩」（杉原四郎・一海知義著『河上肇―学問と詩』所収）によって私は知っていました。全集月報に触発されて、全文を読みたくなり、近親の方にお願いしました。小型の、今日でいう新書版にちかい書物です。ケースから出すとレンガ色の布表紙、背文字はない、一枚目の標題紙に「河上政男遺稿」とだけあり、奥付もありません。二～三枚目に、政男の写真と「即興詩人の句を皿にうつせしもの」と解説のある写真とがつづき、「大正十五年十月八日、四七日忌の当日、河上肇しるす」とあるはしがきに政男の遺稿がはじまります。コピーをして、原本に近い色紙の表紙を付し、私は読みはじめました。若者のすなおな文章に引きこまれ、読みすすみますと、「私の生命は永くて後半年だと医者は言ひます、いや、恐らく後一ケ月かも知れません、ひょっとすると後十日かも知れません。……」とショッキングな文に出あいます。死の宣告を受けながらも、若者としての進

学や将来の仕事が語られています。今、親の立場にある私は次第に読みづらくなります。

ここで全集編集部の選にならって、子供の頃に自分も共通した経験を抜粋して、この「河上文献だより」欄を充実させることにいたします。

一銭銅貨

此の家（京都の最初の住居）にいる時に、こんな事がありました、（私は忘れていますが）。ある時、私は母の眼を偸んで、銭の入っている箱から一銭銅貨を一つそっと持ち出そうとしました。母はそれを見つけて「何をするの」ときゝました。母は私の手をぎゅっとひっぱってそこに坐らせました、そして泣きました。それに驚いて私も泣き出しました。（これは、あとで聞いた話です、私は覚えていませんが）。それから母は心配して国にいる母の母に、その事を書いて相談したそうです。そしたら、子供の中には、そんな事はよくある事だから心配しなくてもいゝと祖母から言って来たさうです。その頃、私の友達は、駄菓子屋の子だの、仕出し屋の子供達でしたから、その人達の真似をして、飴玉を買ってみたかったのでせう。

（昭和一ケタ生まれの私は五十銭銀貨で、駄菓子屋のおばさんに叱られ、手をひっぱって母の前にひき出されました）

追記　本書をお読みになりたい方は私のコピーを貸出します。ご一報下さい。なお一冊しかありません。　（センター生　細川元雄）

会員通信

一、墓参記

○河上先生から父、脇村市太郎にいただいたお手紙を、ようやく、紀州の自宅の土蔵に保存されているのを探し出しました。報告かたがた墓参しました。「全集」に掲載していただきます。一九八三、五、二八、（神奈川、逗子　脇村義太郎）

○河上先生のお墓にお参りしますのも、これで三年目。このお参りを機に河上会とのご縁に恵まれ感謝しております。未だ学生の身ですが、今後も先生の著作等を導きとして学んで参りたいと思います。八三、三、二四（兵庫　宝塚　池上雅子）

○念願でした河上先生の墓を訪ねることが出来、感無量です。桜の花の下で静かにねむる先生に、この時に当り祖国の平和への加護を強く祈りました。（山口　防府　上田隆）

二、事務と感想

○何年度会費になるかはっきりとしませんが。（大阪　八尾　柏木十四夫）

○おそうなりました。ほんの僅かですが会費などにあてゝ下さい。（千葉　柏　山上嘉吉）

○会報一四号いただきました。毎号立派な編集です。河上先生を知っておられる人々が年々少なくなって行くことを寂しく思っていますから、いつまでもこの会を存続させて、先生をいつまでも偲び、先生のご遺徳を後世まで伝えたいものだと思います。（大阪　豊中　後藤嘉七）

○八三年度会費をお送り申上げます。ひょっとしたら、八二年度の分が未払いになっていたかも知れません。もしそうでしたら、お手数でも、

何らかの方法でお知らせ下さい。七月の経済統計研究会で大橋隆憲の追悼報告をすることになりました。その原稿を今度の「統計学」（経済統計機関誌）に寄稿します。（東京　豊島　内海庫一郎）

○会費三〇〇〇カンパ二〇〇〇計五〇〇〇（京都　東山　カニエ邦彦）

○何年度分かはっきりしないので、お報らせ下さい。今年の八月から、約一年間、イギリスで勉強してきます。あらためて「自叙伝」を読みなおすつもりで、荷物につめました。（名古屋　昭和　都丸泰助）

○河上肇記念会名簿八二年十一月現在一頁の年額三〇〇〇円をご送付申し上げます。四月からは新振替用紙になりますので、その番号大阪の次の〃0〃か〃1〃か不明につき遅延ながら三月中に送ります。私は昭和四年入学七年卒ですから直接には河上肇先生を知りませんが、隣県人性がわかるつもりでいます。（広島　南　青盛和雄）

○貴会が河上肇先生の精神を永く広く伝える研究と事業に奮闘されるとの趣旨に賛同して会費を納入いたします。（兵庫　宝塚　若林正昭）

○会報をいつもお送りいただきありがとうございます。数年前はじめて法然院の墓前にたち、名刺を入れて置きましたことがご縁で会員にさせていただきました。科学的社会主義に真の確信をいだいて生きてこれましたのも、戦後はじめて発刊されました自叙伝を読んだためでした。お仲間に入れていただいておりますこと、光栄に思っております。（東京　渋谷　渡辺達也）

○いつから、会員となったのか、自分でもわかりませんが、会費とりあえず二年分送ります。（神奈川　藤沢　粟野長四郎）

○会報一四号拝受しました。五八年および、五九年度会費お送り申し上げます。　七月七日（神奈川　逗子　脇村義太郎）

○会費二ケ年分を送る。（埼玉　浦和　小倉倉一）

○会費一年分。他は寄付。住所変ります。浦和市岸町七ー八ー九　岩元鉄郎

○会費、一年分とりあえず送金。会報いたゞきました。いろいろご苦労さまです。深謝！（京都　宮津　沢村秀夫）

○いつまでの分をお払いしたか失念したので、取敢えず二年分をお届けします。（兵庫　西宮　色川幸太郎）

○会費二年分送ります。まだ滞納分がありましたら、ご面倒でもお知らせ下さい。事務局のご苦労に感謝しながら、会報を楽しく読ませていただいております。（大阪　平野区　武田大蔵）

○会費二年分（八三、八四）をお送りします。（愛知　岡崎　天野茂樹）

○おくれましたが会費をここにお送り致します。（東京　文京　布川角左衛門）

○会費お送りします。河上肇の灯が点りつづけますように。（大阪　茨木　岡橋　）

○毎度「記念会会報」を送っていただきありがとうございます。編集者の苦労と努力に感謝しております。今後も頑張っていただくようお願い致します。（福岡　田川　大村俊）

○事務局の仕事、ご苦労さんです。なかなか大変だと思いますが、どうかよろしくお願い致します。（静岡　静岡　垂田澄男）

○未納の会費ご一報下さいませんか？　とり敢えず、一年分、会費お送りしておきます。（熊本　熊本　上妻四郎）

○河上肇先生記念会に「人間とは」の課題を賭してご活躍して下さる諸先生方のご健勝を、はるかに祈念し、感謝を表します。愚生のように、剰余価値学説より奴隷とし臨床実験された脳障害者は、記念会の席をいただくことが、最上の人間に近づく道と思い。　一九八三年酷暑季。（名古屋市　南区　山口幸一）

三、退会、物故

○まことに勝手ですが、今度、退会させていたゞきたく、よろしくお願い申し上げます。（和歌山　田辺　榎本長平）

○会費というより寄付です。色々、記念品をお送り下さるようですが、今後はご無用に願います。（横浜　港北　伏見康治）

○八三年度会費お送りします。私は高令のため脱会します。（神奈川　藤沢　守屋英夫）

○退会します。送付名簿から削除して下さい。（茨城　那珂郡　先崎千尋）

○矢野恒範儀、本年二月六日永眠致しました。会費送ります。よろしく。（京都　右京　矢野のぶ、恒範氏未亡人）

○大好きな河上先生ですが、入れていただいての感想はやはり記念会は学者の会だということです。ひとりで先生の、先生に関係した本を読んで、心を洗います。晩年ですから、万事重荷になることは避けたいと思います。わずかの間でしたが、お世話になりました。この上の発展を、お祈りいたします。（京都　右京区　八木邦夫）

○会報お送り下さいまして有難う存じます。じつは主人常治こと、昨年逝去致しました。ご通知がおくれまして申し訳ございません。これにて退会させていたゞきますのでよろしく。（東京　太田　故平野常治　妻平野八十）

○年会費お送り致します。長い間いろいろと有難うございました。年寄の一人暮しに早く慣れたいものと頑張っています。残念ですがこれにて退会させていただきたくお願い致します。昭和三年卒。（大阪　豊中　花房寿一）

○会費をお送りします。継続的な会組織になると考えずに募金に応じましたので、今回をもって退会させていただきます。悪しからずご容赦下さい。貴会のご降盛を念じ上げます。七月一八日（福島　伊藤昌太）

○主人「浅見信次良」去る五五年五月死去致しまして先頃もご通知申し上げましたのですが、私も八十近くて一人暮しでおりますのでポストへも思うにまかせませんので、何卒よろしく願い上げます。（横浜市　港北　浅見文代）

○河上肇先生の記念会のお仕事をお世話下さり誠に有難いことと思っております。会報などいつもお手数をおかけ致し、お礼を申し上げます。また、年をとりましたので本も読みがたくなりましたので、勝手でございますが退会させていただきます。送料ももったいないので名簿よりお削り下さいませ。ご清栄をお祈り申し上げます。（神戸　東灘　石田喜枝子）

○毎々、会報ご恵送いただき恐縮です。小生は坂本竜馬暗殺事件を追求している一貧老書生、脱落素浪人です。出身校の立命史学会会員である以外、どの会にも所属しない主義です。されど河上先生の「第二貧乏物語」に啓発（終戦直後）された学恩を感謝しています。河上先生顕彰会の敬意を表してカンパとして若干金を送金致します。ご健斗を祈り上げます。

○河上先生の講義を聴いた者として、私はこの秋八七才（満）になり、白内障の進行を前にして読書も必要最小限におさえていますので、もったいないから、会報、今後はどうぞ、お送り下さらないように願います。ズボラな話ですが、会費いつどれだけお送りしたやら、しなかったやら全然記憶しませんので、老人の健忘、粗忽とお許し願い、こゝに表記の金額、会費年額の十年分、とりあえず寄付金として振込みますから、会のしかるべき用途の一端におあて下さらば幸甚です。七月七日（大阪　東住吉区　四宮恭二）

四、入　会

○会報送っていただきありがとう。百年祭に寄付させていただいただけですが。今後も会報等いただけるよう、とりあえず三〇〇〇円送ります。なお下記のように住所変更しています。名簿の訂正お願い致します。尼崎市東塚口町一―一―一―五〇八　松本有一

○毎号の会報をお送りいただき感謝致しております。この機会に加入させていたゞきたくお願いします。貴会のご発展を祈念しつゝ。（二年分払込みます。）七月七日。（埼玉　大宮　飯田栄一）

○入会いたします。会費一年分を送りますので、よろしくおねがいいたします。（佐賀　佐賀　鈴木亮）

五、移転、訂正

○会費一年分お送りします。住所を変っておりますのでどうぞよろしく新住所　京都市左京区岡崎真如堂前三　松岡正美

○いつも会報をお送りいただき有難うございます。このたび左記の住所へ転居致しましたので、ご連絡致します。名古屋市千種区北千種三―二―三、千種東住宅一五―一三　藤田栄史

○旧宛名の学校を休職し、表記の所で高等学校教員組合の専従書記長になりました。「河上肇的精神」が若い人々の中に広まることを願っています。会のますますの発展を祈ります。（山口　山口　河村敏雄）

○会報をお送りいたゞき有難う。会費分にもならないかと思いますが、お届け致します。なお、郵便番号、住居表示に変更がありましたので、よろしくお願い致します。七月五日（川崎　麻生　島崎晴哉）

○住所変更届。大阪市南区難波2丁目1／2太陽生命難波ビル　スミリン住宅流通（株）岸本宏

○会費の納入遅れまして、申し訳ございませんでした。実家に会報を送っていただいておりましたが、下記の住所に変更したいと思いますのでよろしく。茨城県常陸太田市栄町三三〇二　山田健雄。

○住所が変更になりました。新、旧住所。入会させていただきます。また会報一～八号、一〇号が欠号しています。できましたら送っていただけませんか？　実費は送金いたします。（秋田　大館　佐藤力美）

○氏名が川上繁喜で郵送されますが、山上繁喜ですからよろしく。会の発展を祈ります。（北九州　八幡　山上繁喜）

○封筒のあて名がまだ坂部有伸となっています。阪部有伸が正しい氏名ですので、よろしくお願い致します。（京都　左京　阪部有伸）

○住所は堂ビル五〇五号ではなく、堂ビル五一五号です。（大阪　北　小林寛）

六、他

○大門英太郎様　ごきげんよろしく。（兵庫　西宮　松本広治）

○内海先生から会報をいたゞき、貴兄の追悼文を拝見致しました。有難うございました。梅干で思い出しましたので、一筆申上げておきます。まだ梅干が少々残っておりますので、今年の河上祭の時、忘れずお報らせ下さい。お盆も近づいて、またまた思い出すことのみで、涙もろくなっております。暑さに向いますおりからお大切に（京都　右京　大橋満子、大門英太郎宛）

○大橋隆憲先生がおなくなりになったことを知って、びっくりしました。あのトナカイのような鼻をなさった大橋先生の顔がなつかしく思い出されます。先生の志をいつまでも心に残そうと思います。（京都　北区　岸本正美）

○拝復

　思いがけぬお礼状を賜わり、恐縮至極に存じます。昨秋、上洛の折、ふと立寄った法然院でした。以前、墓参の際は、名刺受にも気づかず、まして河上先生記念会があろうなどとは、今日まで知る由もありません

でした。小生は先生の著作を通じて学恩にあづかった末輩ですが、貴会の存在を知り、改めて「河上肇」の大きさに打たれた思いが致します。お礼を言わねばならぬのはむしろ小生の方です。貴会のご尽力に敬意と御礼を申し述べたく筆を取った次第です。敬具（福岡市　城南区　斉藤文男、杉原四郎宛）

編集部記。五七、一二、五付、フクニチのコラムに載った「古都落日」という題の情理を兼ねた名文のコピーが同封されておりました。ご紹介したいのですが、他に発表されたものでありますので、ご遠慮致しました。河上肇情報センターで大切に保管します。

○大変ご苦労です。会費を送金します。岩波の全集、順調な刊行で喜こんでおります。（長野　長野　渡辺敬二）

○先生の漢詩は全集の何回目頃に出ますか、知りたいのですが（東京文京　安藤明道）

編集部記。全集二一巻は詩歌、随筆、識語、詞の鑑賞で一海先生の編になるかと存じます。二一巻の編集について、昨年晩春先生の講演が東京の学士会館であったように記憶致しておりますが、今年の七月九日、杉原先生に伺いましたお話では、最近も新たに相当数（量）の書簡が発掘された由。つれて、詩歌等の発掘もあって、一海先生を喜ばせかつ悩ませているのではないかと編集部では臆測しています。岩波書店編集部に問合わせました所、当初の予定は十一月刊行。初期の詩歌の新発見があり、その関係で刊行準備がおくれ迅速性と完全性という矛盾した願いを満すべく頑張っている最中らしい。暮か年明けか、お互いに楽しみにして待つことゝ致しましょう。

○菊、二、三本のお供え料、お恥かしいですが。（神戸　垂水　曽我まり）

当番日誌

○六月一五日。東京河上会の由。出張のため不参。東京の活動状況について知るところ、はなはだ少ない。健斗をお願いしたい。当番生は東京在住なれど、当分、記念会の事務の手伝いに、とどまらせていただきたい。

○細川氏より法然院の展墓者の名刺、メモを受取る。礼状はすでに発信の由。会員でない方々へ、一四号会報発送の準備をする。その方々の中から新しくわれわれの運動の輪が拡がらんことを。

○西川勉氏の遺児育英資金について、当会でも会員の方々に、ご協力をお願いしました。わが会の多数の会員から、ご芳志をいただいたと伺っております。ご協力をいただいた方々へは募金会から、ご挨拶があったものと存じます。遺稿、追悼文編集委員会から立派な本が出されました。「戦死やあわれ」という名のこの本には、河上肇に関する論文が幾本かふくまれており、西川氏八〇年の年賀状は「旅の座はらへもあへぬ」という河上の歌で初まっておりますから、本会報の図書紹介欄で取上げられるでしょう。会を通じて募金に応じていただいた分は、事務局から、募金会へ送金させていただきました。有難うございました。

○会費の納入について、いろいろの、ご親切な問合わせが重なります。過年度分の会費をどう取扱うべきか？については、会としてはっきりした合意がないように感じます。報告と個人意見を以下に。

一、財政

(イ)八一年度の記念会の活動があまりにも低調で、会員の方々にご迷惑をおかけしました。

(ロ)そのため、八二年会費の請求はご遠慮申し上げました。

(イ)当然のことですが、八二年のささやかな活動が、たちまち財政の破綻をもたらしました。

(ニ)八三年に入って、会費のお願いを致しましたところ、ぞくぞくと会費を振込んでいただき、財政改善は急ピッチで進んでいます。（この辺、河上肇の歴史的、現代的意義と人徳によって、会員が記念会をいかにしっかりと支えて下さっているか）。

(ホ)この調子なら、いま程度の活動なら、今年中に健全財政となるでしょう。

三、当番生の個人的見解

(イ)会の財政が黒字化すれば、過年度の会費は問わないことが適当で。（われわれの国の苦い経験は忘れまい。われわれの会は遠く未来へ）

(ロ)八二年会費を支払われた方の分は、その方の八四年または、それ以降の年の会費に充てる。

(ハ)河上肇記念会として、あらたな運動に取組むときは、プロジェクトとして、会費によらず、べつに寄付を募って推進する。

(ニ)いずれにしても、世話人会で見解をまとめ、総会に提案して、その結論に従うのが良策と考えております。

○当番日記には酒のハナシが出る。読む方は黙殺していただけばいいものながら、書く方は一行毎に恥かしさを振りはらわねばなりません。そのためにアルコールの力を借りることとなる。当番生がアル中になったらこの欄のせいであります。ところで、11号の不注意編集につき叱責下さった方、12号の本欄に名告り出てご指導いたゞくようお願いしたのですが、当会報を立派なものにするため、早く出て来て力を発揮していただけませんか？

（大久保　記）

編集後記　本号に東京河上会でご活躍の大島清先生の玉稿をいただきました。現在、河上肇と櫛田氏蔵の両全集が逐次刊行されている折からまことに時宜にかなった論文をおとどけすることができ、編集者冥利と深謝しています。

前川文夫氏の「貧乏物語」鑑賞、三回をもって終りました。編集者の不手際からとびとびの連載となりましたこと著者および読者に深くおわび申し上げます。

（細川　記）

1. 乗り物（京都市営バス）

◆ 国鉄・近鉄京都駅→５番岩倉行（浄土寺下車）
　→地下鉄四条烏丸乗換え
　32番銀閣寺行（法然院町下車）

◆ 阪急四条河原町駅→32番銀閣寺行（法然院町下車）

◆ 京阪三条駅→５番岩倉行（浄土寺下車）

河上肇記念会

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満一〇年になります。毎年秋には河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は、事務局へご一報下さい。

〒五四二　大阪市南区島之内一丁目一〇番一九号（丸善石油ビル）千代田商事株式会社内　河上肇記念会

貧乏物語　初版

河上肇記念会　会則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。

二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。

四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。

五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。

世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。

六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。会費は年額三〇〇〇円とする。

七、この会則の改廃は総会の議決による。

京都（きょう）に〝煙〟あり

1965年　創刊　只今45号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（70～80才）が出している異色の同人誌、埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを〝声〟欄に収めているのも特色

A5判120頁　頒価500円　〒200円

「煙」　同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児玉　誠方

電話　京都（075）811－7646番

振替　京都　2－15653番